

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K06398

研究課題名(和文) 日本近代建築におけるセセッションの受容と普及に関する研究

研究課題名(英文) A study on reception and spread of Session in modern Japanese architecture

研究代表者

笠原 一人 (Kasahara, Kazuto)

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・助教

研究者番号：80303931

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツでデュッセルドルフやボーフム、フランクフルト、カールスルーエ、ミュンヘン、ハンブルク、ベルリンを訪問し、セセッションの建築の見学調査を行った。日本国内でも、セセッションの普及に貢献した武田五一の建築作品や普及の実態を確認するため、複数の地方都市で見学調査を行った。ドイツでのセセッションは、都市ごとに傾向が異なり、特に都市計画と結びついて集合住宅の外観によく採用されていることが明らかとなった。日本国内では、地方まで広くセセッションが普及しているが、装飾など部分的にパターン化されたセセッション風のデザインが用いられている。日本では、雑誌や作品集などメディアを通じて広まると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This is the study about how did Japanese introduce Secession architectures from Europe and how did Japanese spread them. We visited Düsseldorf, Bochum, Frankfurt, Karlsruhe, München, Hamburg, Berlin etc. to see how are Secession architectures in Germany. We also visited some cities in Japan to see Secession architectures and to see works of architect Goichi Takeda who introduced the concept and the style of Secession from Austria and Germany to Japan in 1910s. As a results, we found that there are differences of design between each cities in Germany, and Secession style is adopted in apartment buildings in some cities. It means that Secession style in Germany is relate to city planning and characteristics of cities. We also found that Secession style were deeply spread to small cities too in Japan. But there are not differences between each cities. They are patternized and just ornaments because that most of Japanese Secession were introduced by magazines and books.

研究分野：近代建築史

キーワード：セセッション ゼツェッション ドイツ 武田五一

1. 研究開始当初の背景

本研究ではセセッションの日本における影響を扱うが、ここでいうセセッションとは、その起源となるウィーン分離派のみならず、それらが影響を与えた周辺分野や周辺国での同様の活動と、それらが生み出す特徴的な建築デザインの総称として用いることとする。

日本近代建築へのセセッションの影響については、これまでも研究が進められてきた。セセッションの元祖であるウィーン分離派の建築については、すでに近代建築の通史の中で位置づけが行われており、日本で展覧会も開催されている。また日本でのセセッションの受容については、それをリードした建築家として武田五一の研究が足立裕司氏によって行われているが、しかしそれ以外の建築家によるセセッションの受容はほとんど明らかにされていない。

またその名称にウィーン分離派の影響をその名称に反映した、1920年に東京で結成された分離派建築会については、日本近代建築史の中で位置づけられ、また山田守や堀口捨巳、森田慶一などメンバーの歴史研究において論じられてきた。近年は建築史家の天内大樹氏によって、分離派建築会の理念や活動が論じられている。だが、分離派建築会のメンバーが設計した建築作品は、セセッションとは異なり、表現主義や表現派と呼ばれるものに該当する。したがって、分離派建築会は本研究が解明しようとするもの、そのものではない。

また、セセッションと同時代の周辺の様式についての研究は進んでいる。日本では、1900年代から30年代までの様式建築からモダニズム建築への移行期にあって、いくつかの様式が並行して流行したことが知られているが、そのうちスパンニッシュ様式の日本での受容と普及の実態については藤森照信氏および丸山もとこ氏が、またアール・デコ様式の日本での受容と普及の実態については吉田綱市氏が調査研究を行っており、大きな成果を挙げている。しかし、それらと並んで当時日本で大きな潮流となっていたはずのセセッションについては、その受容と普及の実態が体系的に論じられたことはない。

一方、応募者は、これまで日本の近代建築史研究に取り組んでおり、特に関西を拠点に活動した日本インターナショナル建築会や村野藤吾といった1920年代から30年代にかけてのモダニズム建築の成立と普及に関わった建築活動に注目してきた。そんな中で、彼らとその活動の初期において理論的な影響を受けたのがセセッションであり、また彼らの活動に最後まで影響を及ぼし続けたのもセセッションであることが明らかになってきた。さらに同時期に、日本では現実の都市の中に、セセッションの影響を受けた建築作品が多数建てられていたことも明らかになってきた。しかし既往研究では、なぜセセ

ッションがそれほど日本で受け入れられたのか、それぞれの建築作品がいつ頃、誰によって設計され、国内でどれほど普及したのか、地域や都市ごとの特徴があるのか、そしていつ頃から見られなくなったのかなど、モダニズム建築の成立の前史とでもいふべき、日本におけるセセッションの受容と普及の全貌やあり方は不明であった。そこで、これまでの研究を踏まえた上で、本研究に取り組む必要があると考えた次第である。

本研究は、日本近代建築史研究において未解明の領域を明らかにするのみならず、モダニズム建築成立の前史として、日本におけるモダニズムの受容と普及の解明にもつながるものである。

2. 研究の目的

本研究は、日本近代建築におけるセセッションの受容と普及の実態について、言説や理論から建築作品のデザインまで、網羅的に調査研究を行い、その特質を総合的に明らかにするものである。

19世紀末のウィーン分離派の結成に由来する様式であるセセッションの理念やデザインが、日本の近代に影響を与えたことは知られている。だが従来、それは建築運動史の一部として、また一部の著名な建築家に活動として理解されていた。しかし、1910年代から30年代までの日本の建築系雑誌や写真集には、セセッション風のデザインの建築が多数掲載されている。現在でも街を歩けば、セセッション風の建築は、関西を中心に国内各地で見られるなど、全国的な現象であった。また日本のセセッションは、当時、オーストリア(ウィーン)よりもドイツから大きな影響を受けたとする証言もある。従来、日本近代建築におけるセセッションの影響は、実態が十分明らかではなかったと言える。

こうした実態を踏まえて、従来の日本近代建築史研究の視点や情報の欠落を埋め、セセッションの日本への影響を総合的、包括的に捉えるべく、本研究を実施するものである。

3. 研究の方法

まず、1900年代から30年代までの日本の建築系雑誌に掲載された論考や建築家や評論家の著書を網羅的に調査し、ウィーン分離派やその他セセッションのメンバーについて言及した論考を収集する。収集した論考から、当時の日本におけるセセッションの評価や解釈、ヨーロッパにおけるセセッションの作品の紹介のあり方を捉える。調査対象とする建築系雑誌としては『新建築』、『建築と社会』、『建築世界』、『建築新潮』、『建築ト裝飾』などが挙げられる。

戦後などに建築家が自らの活動を振り返る論考やインタビューの中で、セセッションについて語っていることがある。例えば村野藤吾はそんな建築家の一人であるが、そうした回顧録の収集も行い、当時の雑誌などにも

表れにくいセセッション流行の実態を捉えたい。

また、実際に建てられた建築作品の写真を調査することで、セセッション普及の実態を捉える。具体的には、前述した建築系雑誌や建設会社の工事年鑑、出版された建築写真プレートなどに1900年代以降に掲載された写真を対象とする。また当時の建築雑誌や記録写真などにも記録されていないセセッションの建築作品が多数存在するが、それらについては、近年各都道府県の教育委員会などがまとめた近代化遺産の調査報告書を活用し、掲載写真の調査、可能な限り現地調査を行い、日本におけるセセッション普及や広がりの実態を捉える。調査した建築作品については、ビルディングタイプ別、都市別、設計者別などに分類し、デザインの傾向やセセッション普及の特徴を捉える。これによって、当時のすべてのセセッションの影響を把握できるわけではないが、調査方法をそろえることで、概要の把握に努める。

また日本にはウィーン工房の影響も見られる。ウィーン工房はウィーン分離派と同時代にウィーンで活動したグループで、そのメンバーも重なっている。本研究では、このような、セセッション周辺のグループや建築家の日本への影響についても着目し、調査を行う。

こうした方法を通じて、セセッションの日本での需要と普及の実態を把握することを目指す。

4. 研究成果

2015年度は、文献調査と現地調査を行った。文献調査については、オーストリアやドイツにおけるセセッションの運動の理念や広がりについて文献調査を行い、日本のセセッション普及に貢献した文献や近代化遺産についての文献の収集を行った。また、ドイツでセセッションが普及したとされるデュッセルドルフやポーフム、フランクフルト、カールスルーエなどを訪問し、日本が大きな影響を受けたとされるドイツにおけるセセッション建築の見学調査を行った。日本国内でも、セセッションの普及に貢献した武田五一の建築作品や地方都市における普及の実態を確認するため、随時見学調査などを行った。

ドイツでのセセッションは、現地ではユーゲント・シュティールに位置づけられていること、都市ごとに傾向の異なるセセッションが見られること、日本のセセッションとは異なった姿をしているものと似た傾向のものがあることなどを確認した。日本国内では、1910年代から20年代にかけて、都市部から地方都市まで広くセセッションが普及していた様子を確認した。

2016年度は、国内の文献調査と現地調査を行った。文献調査については、日本のセセッション普及に関わる文献や現存するセセッション風のデザインの建築について、1910年

代から20年代にかけてのセセッションを巡る紹介や議論についての文献収集を行った。

現地調査については、海外での調査を実施する時間を確保できず、次年度の課題とした。日本国内での調査については、各地に現存するセセッションの建築について、随時見学調査を行った。1910年代から20年代にかけて、大都市から地方都市まで広くセセッションが普及していた様子を確認した。

都市ごとデザインに大きな違いがあるわけではなく、また装飾部分に似たようなセセッション風のデザインが用いられる傾向がある。ウィーン分離派のデザインの影響は感じられるが、部分的なものにとどまっており、パターン化されている。日本では、雑誌や作品集などのメディアを通じて全国に広まっていた可能性が高い。

2017年度は、国内の文献調査と現地調査を行った。文献調査については、武田五一に焦点を当て、武田のセセッションを巡る言説や作品についての文献収集を行った。その成果は、分離派100年研究会で発表した。現地調査については、国外と国内で調査を行った。国外はドイツを中心として、ミュンヘン、ハンブルク、ベルリンなどでセセッション(ドイツではユーゲント・シュティールと称する)の作品の分布やデザインの特徴について調査を行った。その結果、都市ごとに作品の傾向にある程度違いがあること、また1920年代の都市計画と結びついて集合住宅にセセッションのデザインが採用されていることが明らかとなった。国内では地方都市を中心に現存するセセッション風の建物を訪問し調査を行った。ドイツなどと比べて、都市ごとの違いはあまりなく、部分的な装飾様式として、1910年代から20年代にかけて、大都市から地方都市まで広くセセッションが普及していた様子を確認した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

笠原一人、村野藤吾の和モダン - 和風にモダンを潜ませる -、和 MODERN、Vol.10、2017年、24-27

〔学会発表〕(計 2 件)

笠原一人、武田五一のセセッション受容と創作、分離派100年研究会、招待講演、京大百周年時計台記念館国際交流ホール、2017年7月8日

笠原一人、村野藤吾の思想と方法 - 関西大学校舎群を中心に -、関西大学博物館、招待講演、関西大学、2017年4月15日

〔図書〕(計 7 件)

松隈洋・石田潤一郎・笠原一人他、国書刊行会、村野藤吾とクライアント「近鉄」の

建築と図面資料、2017、175

石田潤一郎・笠原一人他、鹿島出版会、日本近代建築家列伝、2017、390

石田潤一郎・松隈洋・笠原一人他、日本建築協会、モダンエイジの建築、2017、351

奥佳弥他、彰国社、モダニスト再考 海外編、2017、352

奥佳弥・笠原一人他、彰国社、モダニスト再考 日本編、2017、424

松隈洋・笠原一人他、青幻舎、村野藤吾の建築：模型が語る芳醇な世界、2015、239

松隈洋・石田潤一郎・笠原一人他、国書刊行会、村野藤吾の住宅デザイン：図面資料に見るその世界、2015、175

6．研究組織

(1)研究代表者

笠原一人 (KASAHARA, Kazuto)

京都工芸繊維大学デザイン・建築学系・助教

研究者番号：80303931

(2)研究分担者

奥佳弥 (OKU, Kaya)

大阪芸術大学芸術学部建築学科・准教授

研究者番号：20268577